

会社から地下鉄を乗り継いで、ようやく社宅に帰ってきたのは十時過ぎだった。単身赴任の中年男性に十二月の東京の木枯らしは堪える。温もりが欲しいと立寄った先は、社宅近くのコンビニだった。コンビニで唐揚げ弁当とビールを買って、社宅でささやかな晩餐を始めた。

「あーうまい」

すきっ腹にビールが染みだした。弁当の唐揚げをほおぼる。最近、腹囲と健康診断の結果が気になるが、どうしても揚げ物とビールが止められない。気にしない気にしないと、自分に言い聞かせて、ご飯とポテトサラダをビールで流し込んだ。

とはいうものの、鏡に映る自分は二重あごで、洋ナシのような典型的な中年体型だ。最近髪も薄くなっていて、若いころの面影がなくなってきたと気になっていた。

東京暮らしは、仕事すべてといていい生活で、平日は残業続きで社宅に眠りに帰る生活の繰返しだった。休日はパチンコ屋に通い、夜に馴染みの居酒屋に行くのが唯一の楽しみだった。昔、映画監督を目指していたのは夢の話に思える。

今の会社は、大学を卒業してからずっと勤めていて、四十歳まで故郷の福井支店のみの勤務だった。

本店のある東京勤務となったのは今年からで、九ヶ月がたち仕事に慣れてきたと感じてはいたが、東京暮らしにはなかなか慣れなかった。

弁当とビールがなくなると急に寂しく感じる。買い置き芋焼酎をロックで飲み、乾きものをつまむ。バラエティー番組を見ながら焼酎を飲むと、とてもリラックスできるし、仕事の疲れを忘れることもできる。私はいつもと同じように、バラエティー番組のトークを見てにやにやしていた。

ほろ酔いになったところで、スマートフォンをチェックを始めた。スマートフォンは最近買ったが、使いこなせていない。ラインのアイコンに、1という数字が記載されていたのでチェックした。福井に住む妻からのラインだった。内容はビックリするものだった。「メトロ劇場の館主の、山岸さんが亡くなったそうです。お通夜は、明日の午後七時からどうぞです」

ラインの文面を読み返した。山岸豊さんとは最近疎遠になっていたが、三〇歳代中頃まで映画を通して、年の離れた同志というか、戦友のような関係だったので、驚いて酔いが醒めてしまった。動揺したので、気付け薬として、焼酎をもう一杯飲むことにした。酒飲みの悲しい性で、動揺したときは酒の力に頼るしかなかった。

妻に、明日福井に帰るとラインを返し、布団に入り眠ることにしたが、山岸さんの事を考えると眠れなかった。布団の中で朝まで天井を見ていた。

翌日、午前中に仕事を切り上げて、上司に事情を説明し、新幹線に飛び乗った。米原までは澄み切った晴天だったが、米原で特急に乗り換えると、途端に鉛色の空が重苦しく感じた。懐かしい景色だが、山岸さんの事を考えると、憂鬱な気分になっていた。

福井駅で降りると肌寒く、辺りは暗くなっていた。駅前の通路は足が埋もれるくらいの積雪があり、革靴がぬれて冷たかった。故郷に帰ったことを実感した瞬間だったが、感傷にふける間もなくバスに乗り換え、自宅へ帰り、喪服に着替えて自家用車で葬儀会場に向かった。

車中で、映画が生活の一部だった時代の記憶が少しずつよみがえってきた。

大学を卒業して会社員となった私は、仕事に慣れるまで精いっぱい頑張り、直ぐに営業の結果を出すことができた。

しかし、仕事に慣れてしまうと、無趣味だったので休日は時間をつぶせず、休日がくるのが苦痛になっていた。

ある日の休日、福井市内のメトロ劇場で、ベネチア映画祭でグランプリをとった、北野武の「HANAABI」が上映されていると知り、暇だったこともあり、見に行くことにし

た。

福井市片町の建物四階に、メトロ劇場はあった。エレベーターを降りると、直ぐにチケット売り場があった。

チケット売り場に山岸さんがいた。長身で金属製の眼鏡をかけ、ロマンスグレーの髪色の紳士っぽい人だった。人なつっこく微笑む顔が印象的で、こんな人がいるのなら、アットホームな映画館だと第一印象を感じた。

マニアっぽい人たちと北野映画を見たが、正直内容はさっぱりわからなかった。ただ、北野映画に引く掛かるものがあり、またメトロ劇場に来ようと思った。

それから、メトロ劇場通いが私のルーチンとなり、週末はメトロ劇場にとっぷりつかった。黒澤明のリバイバル上映や最新のヨーロッパ映画はとても新鮮だった。

それまでは、多くても年に数回、ハリウッドの大作だけしか見たことがなかったのですが、メトロ劇場で上映する映画は、どれも発見があった。

自主制作の映画を集中して上映した期間もあり、のちに、「フラガール」を監督することになる、李相日という青年が監督した「青春chong」を見た。この映画は、北野映画に似ているが、オリジナルテイプがあり凄く面白い青年が世の中にいると思った。映画が終わった時、私もいつかは、李監督のようになりたいという気持ちで少し芽生えていた。

メトロ劇場通いから一年がたった頃、レイトシヨウの時間待ちのため、劇場の待合用ソファに腰かけて映画のチラシを見ていた。

山岸さんは、チケット売り場でこやかな表情で私を見ていた。そして、ソファの方へ歩いてきた。私はビックリして固まっていた。山岸さんは私の前まで来て話し出した。「いつもありがとう。ここ一年間ぐらい毎週末ももらっているね。私は山岸と言います。えーっと、うちのポイントカードをつくってもらっていたね。名前は確か、坂本君だったね」

私は無言で、頷いた。

「もしよかったら、今後、坂本君がメトロに来たら僕と映画談議しないかな。僕は君みたいな熱心な映画青年と、映画談議ができることが、とても楽しいので・・・」

山岸さんの目は少年のように輝いていた。私は、山岸さんの目を見て話しかけた。

「是非お願いします。この一年間でかなり映画を見ましたが、なかなか映画を語るの難しいですね」

「映画を語ろうと思ったら、一年間で最低、百本は劇場で見た方がいいね。映画の見方が自然とわかるようになるよ」

山岸さんは笑いながら言った。百本という数字にびっくりしたが、それから何年間も、劇場で百本以上の映画を見ることになる。確かに構図の作り方や脚本が、映画を見て語るようになっていた。

山岸さんから、昔活躍した日本の映画監督の、中平康や増村保造の作品がいいと聞くとTSUTAYAで探して浴びるように見たのもこの頃だった。

ただ、映画だけに熱中したせいで、会社の同僚との、ゴルフなどの付き合いもなかったりで、変わり者に思われていたと思う。しかし、全く気にすることもなく、山岸さんに会い、映画を語るのが楽しみになっていた。

そんなある日、山岸さんが映写室を見せてくれた。映写機が光を放つ様子は幻想的に感じた。魔法の国の入り口を見てしまったようにも思えた。

山岸さんは、その頃大好きだった映画、「ニューシネマパラダイス」の映写技師アルフレードにみえた。私は主人公のトトのように映画監督になり、自分の作品を観客に届けたいとこの時思った。いつか映画監督になれたらと・・・。

それから数年がたち、私は映画評論を書きだした。福井映画サークルという同好会に、毎月のように投稿を始めた。思いのたけを詰め込んだ長文は、今再読すると、とても恥ずかしいものだが、山岸さんは毎月読んでくれていて、決まって褒めてくれた。ただし、数を書けば段々上手くなるよと言われたので、内容は今一つだったのだろうと思う。

子供の頃、作家になりたいと卒業文集に書いたが、とっくに作家への夢はあきらめていた。しかし、映画評論を書くことで少年の頃の記憶がよみがえり、文章を書くことが楽しかった。

ある日、山岸さんから、自主制作映画監督の、戸田博さんを紹介された。戸田さんは、自身で脚本を書いていたが、脚本家を探しているとの事だった。

メトロ劇場のロビーで戸田さんに会った。皮ジャンパーに、ジーンズで丸坊主の風貌は強面で、ビビった。しかし、映画にかける情熱を知り脚本を書くことにした。

戸田さんに見てもらうために、一気に書いたのが、「許し」という作品だった。少年犯罪を描いた作品で、荒削りとは思ったが、自分の中では自信作だった。戸田さんの感想を聞きたかったが、なしのつぶてだった。

返事が聞きたくてやきもきしていた私は、山岸さんに脚本を見せて、戸田さんから返事がないことを相談した。山岸さんは、丁寧に私の脚本を熟読してくれた。そして、渋い表情で話し出した。

「うーん。坂本君の作品は、どこかで見たことがある気がするね。戸田さんはどこかで見たことがある作品は嫌じゃないかな。それと台詞での説明が多いから、テレビの脚本みたいに感じたかもしれないね」

恥ずかしい話だが、自信作が酷評されてムツとして、この日はメトロ劇場で映画を見ることもなく、自宅に肩を落として帰った。

その後、何回も戸田さんに色々な脚本を送ったが、よい返事をもらえなかった。見かねた山岸さんから、勉強もかねて、戸田作品に俳優として参加することを勧められた。あまり気乗りしなかったが、山岸さんに勧められるままに、戸田組に俳優として参加することとなった。

「明日はGOKURAKU」という脚本を山岸さんから渡されたが、事前に読む暇もなく、十一月の霜が降りた日の夜、福井市郊外のマンション前に撮影のために呼ばれた。山岸さんは、初老の男役で出演するとの事だった。私は山岸さんからむ、車上荒らしの男役だった。

パーカーのフードをかぶり人相を分からなくして、車中の貴重品を盗もうとする男という設定だった。車上荒らしのペアの女役として、同年代と思われる松本和美さんという女性が来ていた。助監督の笠川瑞穂さんに、松本さんを紹介された。

「坂本です。よろしくお願いします。撮影現場初めてです。とても緊張しています」

松本さんに、ぎこちなくあいさつした。松本さんは私のタイプの女性で、撮影現場に参加したことをラッキーと感じた。

「松本です。よろしくお願いします。私も初めてです。坂本さんに頼りますので指示してください」

松本さんは恥ずかしそうに話した。その仕草に好感をもった。

撮影が直ぐに始まった。自動車付近で不審な動きをする私たちに、山岸さんが台詞を喋る。

「あんたら、泥棒でねえんか」

山岸さんは、迫真の演技で台詞を喋った。

「泥棒って言うでねえんや。車上荒らしって言うんや。あほ。」

私は、緊張することなく、悪ぶって台詞が喋れた。

「あほ」

松本さんも緊張の糸が解けたのか、悪そうな女役を熱演し台詞を喋った。私たち二人は山岸さんを睨みながら暗闇に消えて、出演場面の撮影は終わった。

松本さんに挨拶して別れたが、俳優が楽しく感じ、また撮影に参加したくなった。

その後も誘われるままに、戸田組の撮影に役者として参加した。刑事役やチンピラの役などを演じた。どの撮影も楽しかったが、撮影現場には、いつも松本さんがいた。参加の一番の目的は、松本さんに会うことだったかもしれない。

始めのうちは、

「松本さん」

「坂本さん」

と、呼び合っていた私たちはいつしか、

「和美」

「秀樹君」

と、お互いの名前を呼び合うようになっていた。すぐに撮影現場以外でも二人きりで会うようになり、出会ってから、三年後に結婚した。結婚式には当然、山岸さんと戸田さんにも来てもらった。

映画にかかわる趣味をもててよかったと、幸福を感じていた時期だった。この頃、戸田さんから、脚本を採用してもらえるようになっていた。

そんなある日、山岸さんから脚本について相談を受けた。福井市内のある団体が、郷土の偉人を題材に、映像作品を作る企画があり私に脚本を書いてほしいと依頼があったとの事だった。

私は、かなり時間を費やし、郷土の偉人である、橋本左内に関する脚本を書き、山岸さんに渡した。企画が動くことに期待した。

しかし、期待通りに事は進まなかった。その後、山岸さんに会っても、よそよそしく、私を避けているようにも感じた。山岸さんに何度も、企画の状況を聞いたが、あいまいな態度の繰返しだった。企画が没になったことはなんとなく分かったが、山岸さんからの説明がないことに無性に腹が立った。

今思えば、山岸さんなりの、私を傷つけたくないという、心遣いだったと思うが、まだ子供だった私には、山岸さんの気持ちを理解できず、自分の怒りを抑える事も出来なかった。怒りが頂点に達し、携帯電話に登録していた山岸さんの電話番号を削除し、メトロ劇場に行くこともやめた。

もやもやした感情だけが残っていて、しばらく何も手につかなかった。このままではいけないと思い、数ヶ月考えた末、自分の力で新たに映画を撮る決心をした。中学校の先輩で、うどん屋を経営する、石田直人さんに主演をお願いし、快諾を受けた。映画製作と編集は、自治会の活動で知り合った、水道関係の会社を経営する坂井正明さんをお願いすることにした。こうして、新たな仲間達と映画を作ることにした。

映画の題名は「九頭竜エレジー」と決め、脚本は私が書いた。中年男性の恋や娘の結婚など様々な事象を通して、私を投影した主人公の心情を描いた。

経験不足な私たちに、福井フェニックスビデオクラブの代表である、西川一郎さんが撮影に協力してくれた。不安でいっぱいであったが、仲間に勇気づけられて、坂本組の船出が始まった。

撮影日数は、一週間と決めた。私の自宅でロケが始まった。

「はい、スタート」

私は、映画監督として、初めて撮影開始の合図をした。世の中にこんな快感があるのかと思ったが、撮影中に様々なトラブルが待ち構えていた。いつそのことやめようかと思つたこともあったが、気弱な監督を石田さんや坂井さん、そして経験豊富な西川さんがサポートしてくれて、撮影はなんとか終了することができた。

その後、坂井さんに半年以上の間、編集に協力してもらい、映画は完成した。荒削りであるし、反省点はいっぱいあったが、夢にまで見た処女作が完成したのだから、感慨深いものがあった。

撮影に協力してくれた地元公民館で、「九頭竜エレジー」を、自主上映することができた。多くの観客の皆さんに作品を見てもらった。

いつかは自分の作品を観客の前で上映すると、メトロ劇場で誓った夢がかない涙で目が潤んだ。

しかし、映画が完成したことを、山岸さんに伝える事が出来なかった。伝えられなかったことが、その後も気になっていたし、連絡をとりたかったが、意地を張って、連絡をと

ることは、どうしても出来なかった。

その後、「九頭竜エレジー」は、多くの人に愛され、福井駅前短編映画祭の新人賞もいただいた。よい経験をさせてもらえたと思った。

受賞を一つの区切りとして、私は映画作りから距離をおくことになった。受賞してすぐに子供が生まれ、育児が生活の中心になったことも、原因の一つとしてあったかもしれない。

坂本組のメンバーに、「九頭竜エレジー」の次回作を作ると宣言していたが、中断したままでほったらかしとなり、映画館にも行かなくなった。山岸さんに会うこともなく、やがて東京に転勤することになった。

葬儀会場に向かう車中で、今までの自分を振り返ると、あまりにも中途半端で、ブルーな気分になり、ため息をついた。外は猛吹雪になっていて、対向車線を走る車も少なくなっていた。

葬儀会場に着き、喪主で山岸さんの息子さんの、山岸秀幸さんに挨拶した。

祭壇に焼香して、山岸さんとお別れした。横殴りの雪が降る中、自宅に帰ったが、意地を張らずに、山岸さんに生前に会わなかった事が悔やまれた。

翌日の早朝に、東京にとんぼ返りし、いつもの生活に戻った。仕事が忙しくて、山岸さんの事はなかなか振り返ることができなかった。

ある日、社宅に妻から、宅急便で段ボール箱が届いた。箱を開けてみると手紙が入っていた。箱の中に、山岸さんの息子さんから預かった品物が入っているとの事だった。

中には、私が書いた「橋本左内」の脚本が入っていた。山岸さんが作ったと思われる、「橋本左内」の絵コンテや、ロケ地候補を撮影したDVD、スタッフや俳優のリスト、幕末の福井藩に関する資料なども入っていた。

絵コンテをめくると、涙があふれてきた。山岸さんが撮影のために準備してくれた他の品々を見ると、涙が止まらなくなっていた。

「工夫すれば、低予算でも、どんな映画だって作れる」

山岸さんの持論だった。山岸さんの遺志を受け継ぎ、もう一度映画を作ろうと思った。手始めに、山岸さんとの交友を、小説に書こうと思った。涙をタオルで拭いたら、気持ちが前向きになったようにも思えた。私の同志の山岸さんにありがとうと言いたかった。押入れからパソコンを取り出し起動した。ワードを立ち上げ、題名「メトロシアタードリーム」と入力した。

今日から毎日小説を書き、完成させるつもりだ。映画も必ず撮影すると、心の中で誓った。